石田頼房先生をしのぶ集い

2016 年 10 月 29 日（土）15：00～16：45　明治大学駿河台キャンパス 1031 教室にて

追悼シンポジウム　第二部　石田頼房先生―都市計画研究者・実践者としての業績－
要　録

コーディネーター　中林 一樹

パネリスト　渡辺 俊一

中島 直人

饗庭　伸

この記録は当日の録音記録をもとにしていますが、かなりの要約となっています。登壇者（渡辺・中島・饗庭および中林の各氏）には目を通していただいていますが、文責は要録者（高見澤）にあります。なお、後半の会場からの発言については目を通していただいていないままの要約です。

中林

第一部では、研究者であるとともに教育者・実践者でもあった石田頼房先生から何を学んだか、またそれらを次の世代にどう伝えるべきかについて教え子たちが報告しました。引き続いて、先生の研究と実践を中心にした討論を研究者 3 人にご登壇いただいて行いたいと思います。いわば第一部は教えを受けた者たちからの内部評価でしたが、第二部は直接講義を聴いてはいない 3 人の方々からの、外部評価とも言えましょうか。先生の業績、またそれへの評価、それらを踏まえた上で都市計画研究としての、我々にとっての今後の課題などを考えていきたいと思います。

以下では、皆さんを「先生」と呼ばずに進めることをご了承ください。まず、渡辺俊一さんにお願いします。

渡辺

石田さんは、私にとって高山研の兄弟子であり大先輩、なによりも都市計画学界の巨匠でありますから、後に続く一学徒として、今日お招きいただいたことは大変に嬉しく、心からお礼を申し上げます。

石田さんの研究者としての歩みは、追悼集の 9 頁以下に書かせていただき、またその英文版はこの 6 月にデルフトで開催された IPHS（国際都市計画史学会）で発表しました（その論文タイトル等は追悼集 16 頁の最終行にあります）。

今日はこれらを踏まえて、石田さんの研究成果の全体像を私なりにお話し、特に次の世代にどのように研究を引き継いでもらうか、について問題提起をいたします。

まず石田さんの略歴ですが、スライド（お配りした資料）の通りです。1932 年に東京の西の郊外で生

まれ、1955 年東大建築学科を卒業後、大学院へ進みます。高山英華先生のもとで博士の学位をえて、1960 年から東京都立大学、現在の首都大学東京で研究者の途をひたすら歩んだのです。1955 年、都立大を定年退職され、工学院大学でつとめたのち、1999 年、67 才で完全に退職され、研究に趣味にと豊かな時を楽しまれたのですが、2009 年、病に倒れて 6 年間病床にあり、昨年 11 月に 83 才で逝去されました。

次のスライドは石田さんの研究テーマについてです。その出発点は「土地利用規制」、具体的には当時大きな問題であった大都市周辺部のスプロール問題でして、学位論文の成果の一端は 1968 年の都市計画法改正において区域区分の制度として反映されています。新進の研究者としては、ある意味でとてもハッピーなスタートを切った言ってよい、と思います。

その後、研究テーマは、土地利用の「規制から計画へ」と拡がり、それらの明治以来の歴史的経緯、つまり都市計画史へと展開していったのです。とくに 1987 年刊行された『日本近代都市計画の百年』は（2004 年に「増補版」となりましたが）日本人の手になる初めての、かつ唯一の日本都市計画の通史として、今でも都市計画を学ぶさいの標準的テキストとして広く読まれています。

さらに、わが国都市計画には海外からの影響があることから、海外都市計画（特に西欧）都市計画の研究へと関心を拡大していったのです。1988 年に東京で開催された「第３回 都市計画史 国際会議」を契機に、国際的な論文発表・会議出席・研究者交流などを活発に進めました。1990 年代頃からは、日本都市計画をトータルに捉える方向へさらに展開します。そのテーマは「計画論」であり、「都市農村計画史」であります。そこに至る道筋は、2004 年刊行の小冊子『展望と計画のための都市農村計画史研究』に記されています。全体を通して言えることは、石田さんは、土地利用規制という原点から、連続的・段階的に自らの研究関心を広げつつ、全体の体系化への途を着実に辿った、と言えると思います。

研究方法論の点でみると、石田さんの 40 年以上にわたる「研究のあゆみ」は 1980 年代を境に大きく２分されます。前半では、1968 年都市計画法が成立し、ついで地区計画制度が導入され、彼の理想とする「詳細で厳しい土地利用計画」への途を辿りました。1970 年代には革新自治体が出現し、「民主的都市計画への方向」が続いたのです。このような中、研究の方法としては、綿密な「実態調査」を通して「制度提案」を行うというのが基本スタイルでありました。

ところが、1982 年の中曽根民活によってガラリと社会政治の風向きが変わります。「民活」の提起した論点は、正に研究者・石田頼房のこれまでの全研究を否定するものと映りました。彼の研究パラダイムと、時代のパラダイムとが大きく乖離したのです。こう記しています。民活は「1968 年都市計画法･･･によって、やっと形を整え、1980 年の地区計画制度などによって補強しつつあった『詳細で厳しい土地利用計画制度』という檻を壊し、地価という虎を野に放ってしまった」と。彼はこれを「反計画」として厳しく批判します。

以降、後半は 2000 年代初めまでの約 20 年間で、石田さんは、都市計画法制への批判にまわります。土地利用計画の本質を追究しつつ、研究方法は歴史･海外研究など理論･文献研究へと移ります。こうして「前期石田」から「後期石田」へと変身していったのです。

「後期石田」の主要テーマに計画論、正確には「反計画」論があります。彼によれば、中曽根民活は「1968 年都市計画法･･･以後･･･の･･･土地利用計画･規制の強化･･･地域住民･地方自体体の役割の拡大･･･（という）日本都市計画史全体の･･･進歩に対する逆流である･･･『規制緩和』･･･というより『反計画』

（ディスプランニング）」だ、となります。「反計画」は石田さんの造語ですが、中曽根民活に限らず、「石田都市計画史」における主要な時代区分のキーワードであり、現代をもカバーする概念なのです。

パラダイムの乖離が決定的になったとき、彼はどうしたか？　「計画」とは何かという、より根源的な設問を自らに課して、日本都市計画史の中で探ろうとしたのです。結果はこうなりました。計画とは「都市･･･の共同の意志･目標像としてのプランを持ち･･･効率的に実現してゆくための方法･手段を筋道たてて企てること（であるに対して）民活路線は規制をなくし･･･共同の目標像としての計画という･･･概念はまったく見られない」。だから「反計画」だ、という訳です。

歴史研究の目的について、石田さんの研究を特徴づけるものに「実践への強い志向」があります。こう記します。「私は都市計画の歴史研究者と見られがちですが、自分では歴史研究者というより主として都市農村計画の実際的問題に取り組んでいると思っています」と。

では「研究者」として何をすべきか？　それは「法則性の発見」です。「変容（つまり歴史）研究は･･･都市･･･の『発展法則性』の研究」であり、それにより都市計画のあるべき姿を探りだすことにあるのです。」ここには「法則から実践は如何に導かれるか」という重要な論点が秘められています。

歴史研究の目的をめぐって興味深いのは、1995 年の最終講義である「2019 年への都市計画史」です。これは、25 年後の 2019 年をターゲットとして「望ましい、可能な都市と都市計画の将来像」を提起し、それを段階的に達成するためには、計画制度や計画主体が如何にあるべきかを描いたものです。彼にとっては「未来史」さえ実践との関連で語られるのです。むろん、このようなことが歴史研究の方法論として可能かどうかは問われるところでしょう。

まとめに入ります。特に次の世代の方々へ、石田さんは何を研究遺産として遺したか。それを「いかに受け継ぐべきか」についてお話して、終わりたいと思います。まずその前提として、石田頼房という人物は、一言でいってどんな研究者だったのでしょうか。私の判断では、明治以来 150 年の歴史において、都市計画について、これほど「広く」研究対象を体系的にカバーし、「深く」資料を発掘・分析・論証し、「多く」の高水準の著作を遺した者は、まず居りません。まさに第 1 級の研究者です。その成果は「学ぶに値する」「公共財」となっているのです。

では如何に学ぶか、です。真っ向から「石田頼房研究」を行うのです。まず、彼の研究成果の全体像を正確に理解するのです。その中で、自分の興味のある点を批判的に、また「違和感」ある論点を深く掘り下げる。そして、彼と対話する型で適切な設問をつくるのです。例えばこうです。「都市計画技術の中心は未だ土地利用規制なのか？」「都市計画における市場・企業の役割は何か？」「石田都市計画学にない現代的テーマは何か？」などです。

石田さんから学ぶもう 1 つの点は「研究管理のシステム」です。彼は非常に充実した記録のシステムを残しています。履歴書は無論のこと、綿密な「年譜」があり、自己の「著作リスト」は 860 余の全著作を分類整理しています。さらに興味深いのは、「自省研究」とでもいうべきユニークな領域です。石田さんは個別研究を進めるにあたり、常に自分の研究体系を見渡し、そこに位置づけながら論を展開しています。ですから、論文巻末の引用文献に彼自身の著作が多く記されているのです。その好例は、1993 年の「都市農村計画における計画の概念と計画論的研究」論文であり、また自らの論文から主要著作 30 本を選らんでコメンタリーを付けた 1998 年頃の「石田頼房の都市計画論文・評論：自選 25 編＋α の解

説」論文です。さらに、研究上の「自分史」ともいうべきものが上記『展望と計画･･･』小冊子です。このように自分の知的営みを体系的に管理している研究者は、まれではないかと思います。

最後に、今後盛んになる「石田頼房研究」の有力なツールとして、彼の「著作リスト」と「主要文献の pdf 版」をウェブ上で公開してほしいと考えます。この「石田アーカイブ」の設置を提案して、今日の会を契機に、さらに多くの方々が石田頼房研究の面白さを見出し、読み、批判し、議論することを期待して、私の拙い発題を閉じたいと思います。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

中林

ありがとうございました。「研究者 石田頼房」の全体像が提示されたと思います。では引き続いて石田の都市計画史研究をテーマに、中島直人さんにお願いします。

中島

私が日本都市計画学会で初めて論文発表をしたのが 1999 年なのですが、90 年代、そして 00 年代前半に論文発表会に出ると一番前に座っておられたのが石田頼房先生（と渡辺俊一先生）でした。我々の世代で都市計画史を研究する者はとにかく先生からコメントをもらいたかった。もらえないことが一番残念なことでした。先生のコメントに何とか答えたいと思っていました。

先生の研究と研究者像については渡辺先生から十分に語られたので、私は石田先生の研究を相対化する視点でお話したいと思います。スライド（お配りした資料と同じです）も使っていきます。

まず触れたいのは先生と同じ頃活躍し同じ頃亡くなられたピーター・ホールのことです。偶然かもしれませんがともに 1980 年代に都市計画の通史を書かれ 2000 年代に入ってそれを改訂されている。ホールによる著作、“Cities of Tomorrow”は欧米を中心とした通史としてかなりスタンダートと思うけれど、石田先生の通史と目次を較べてみると、その違いが分かります。石田先生の目次では（2004 年版）ほぼ各章に＜都市計画＞という言葉が入っているのに対してホールの目次では、計画ではなくてその結果生まれた“都市、都市像”が主題で章のタイトルも“City”をめぐったものになっています。石田先生においては計画技術の発展史が中心となるがホールの場合には理念・イデア、そしてその背景となる社会的状況が中心となります。我々にとっては石田先生の通史しかないのでそれが「通史」だと思うのですがが、いろいろな通史の書き方があることも認識しなければならないでしょう。

シンポジウムの第一部でも石田先生からいろいろな影響を受けたことが語られましたが、石田先生も影響を受けた先生がいます。それは次のスライドの高山英華で、影響を自覚されていたところもありましょうが、自覚されないまま影響を受けた部分もあるのではないかと思っています。そのうちでも都市計画を技術的に見るという点において高山の影響が大きいのです。高山は都市計画学会創立の時、学会誌『都市計画』第 1 号の「都市計画の方法について」で、都市計画においては計画技術のよりどころをしっかりとしなくてはならない、それ以上のこと、都市はどうあるべきか、といったことはペンディングしておいて都市計画技術に集中しようと書かれました。石田先生はこのような枠組みをかなり強く受け継いでいるのではないでしょうか、その枠組みにおいて活躍されたのではと思います。高山先生が敢えて外した都市の目的設定とかが石田の視野に入っているかは、議論すべきところでしょう。

ところで90年代以降の我々が先行研究として位置づけたのが、石田・渡辺・越沢先生の諸論文でした。石田先生が通史であるならば、渡辺先生は都市計画の概念や構造を原点にまで遡って考えようとのアプローチを取られています。越沢先生は出来たものがどんなか、それがその後どうなっているかがテーマと、敢えて分類すればなるのではないでしょうか。

都市計画研究を社会への貢献という視点から見ると、縦軸を「実践」とし、実践へ直接役立つか間接か、横軸は制度・システムかプラン（空間）とし、そのどちらにウエイトが置かれているのかという、スライド（お配りした資料）に示す2軸の図式が描かれ、その図式の中に3人の先生方の研究が配置されるでしょう。このような図式の中で、我々の世代はどのような研究をすればよいのかを考えてきたといえます。

さて、先生の研究を受け継いで乗り越えてゆくのには、敢えて石田通史に挑戦することも必要でしょう。石田通史を規定する法則性とか公共性の概念といった歴史観を改めて検証する必要もありましょう。例えば、先に設定した制度－プランという軸は現実の事象の中でさらに広がってきています。制度やシステムは法制度だけではなくなってきているし、プランや空間も単にそのフィジカルな姿だけでなく、社会全体の姿へと広がっています。また縦軸、実践の軸も専門家としての実践だけでなく、多様な主体による実践へと広がってきているのです。今、そのような認識で我々は研究を進めているのですが、これは都市計画史が、都市史の方法に近づいてゆく姿かもしれません。

石田先生は、都市計画史研究とは何か、それを通じてどのように社会に貢献できるかを考え続けていたと思いますが、そのことを2000年代に入ってM.Burawoyなどによって提唱されたパブリック・ソシオロジーの図式を借りて説明するとどうなるでしょうか。

すなわち、その主題が横軸の専門家内の議論なのか一般社会での議論なのかの方向性、縦軸の手段的な（技術的な）知識なのか反省的な（目的・価値にかかわる）知識なのかの方向性、この縦横軸の図式において研究を位置づけられるのではないでしょうか。左上の象限にあるプロフェッショナル都市計画史、専門家として発信し、できるならば具体的制度に反映させる右上のポリシー都市計画史、このような都市計画史に石田先生は深く取り組まれたと思います。それに対して都市計画史研究の役割には都市計画そのものの目的や価値を大きく変換させる役割があるのではないでしょうか、つまりクリティカルな都市計画史というものがありましょう。渡辺先生はこのような都市計画史研究をされてきているのではないでしょうか。さらにはパブリックな都市計画史も我々の前にあるのではないでしょうか、一般の人たちに都市とは何か、都市計画とは何かを考えてもらうための都市計画史研究です。そしてこれは実は、先に渡辺先生が挙げられた石田先生の“2019年への都市計画史”の中に都市や都市計画が市民の中でつくられることとして提示されています。先生がパブリックの都市計画を意図されていたと我々は読み取ることもできそうなのです。以上で終わります。（拍手）

中林

ありがとうございました。では次に、計画論あるいは都市計画の実践論といった視点から饗庭伸さん、よろしくお願いします。

饗庭

私はいま首都大学東京におりますが都立大学の出身ではなく、お話ししたことはあるにしても直接に教わったわけではありません。さて、お配りした資料に書きましたが、石田先生は「都市計画とは都市の発展法則性に働きかけて都市を変えること」と仰っています。この言葉を読む限りでは、先生は都市の法制度発展にかかわる法則性を追究されたのではないかと思います。そこで法制度ということにこだわって考えてみました。哲学者のドゥルーズは、「法」と「制度」という言葉を切り離して定義しています。法は「行為の制限」、制度は「行為の肯定的な規範」として定義されます。分かりやすい言葉に言い換えますと、法というのは上からのもので、制度は人々が自分たちの生活を調整する中で生み出されるものということです。そして、「多くの制度とごくわずかの法を持つ政体」が民主主義である、と定義されています。

これを近代都市計画に即してみれば、1919年の都市計画法は明治以来の都市化を制御するためにつくられた「法」で、50年後の1968年改正までその構えは変わっていません。それに対して1960年代の末頃に人々が「制度」をとして編み出したものが「まちづくり」というものではないでしょうか。たとえば1980年代の足立区地区環境整備計画は、区を地区にわけ、一つ一つの地区で住民が自分たちのまちづくりの計画を立てていく、というシステムを持っていました。上からの法でとりあえず全域をカバーした上で、オセロゲームのように徐々にまちづくりで制度を上乗せしていく、つまりこれが「多くの制度とごくわずかの法を持つ政体」への転換の過程、すなわち都市計画の民主化ではないかと考えるのです。そのときに、人々が「制度」を作るときの手がかりは「市民」という言葉と「コミュニティ」という言葉でした。前者は1960年代に松下圭一が提唱し、後者は自治省のコミュニティ報告（1969年）が提唱し、この二つの言葉を手がかりにドゥルーズがいうところの「制度」が作りだされてきました。

もう少し細かく近代都市計画の時代を見てみます。江戸期につくられた都市空間は、そのまま明治維新後の東京に引き継がれました。特に東京は維新の時に大きな戦乱に巻き込まれなかったので、空間の流動性は低く、近代都市計画もそれほど機能しませんでした。しかし関東大震災を契機に空間が流動化し、近代の都市計画が機能しはじめます。石田先生はそのあたりを中心にして丹念な実証的な研究を進められました。そして高度経済成長期の末期に、市民とコミュニティに依拠した制度的な都市計画、つまりまちづくりの時代が到来し、さらに先生が反計画と言われる事象がおこります。先生は「反計画」と、つまり都市計画ではない、とはっきり言っておられますが、私は市場セクターが発達させた「制度」による都市計画と考えています。つまり、市民とコミュニティによる制度と市場による制度の二つの制度が並ぶ時代に入っている、ということが私の見立てです。その二つの制度の違いは、前者の制度がどちらかというと空間の流動性を下げる方向に機能するのに対し、後者は流動性を上げる方向に機能するということです。

これから先、人口が減っていく時代になります。人口減はおそらく空間の流動性が下がっていくと思います。その時に、近代都市計画の「法」も、市民とコミュニティ、市場のそれぞれが作り出した「制度」も不十分ではないかと考えています。ここから先の計画制度を考えるため、二つの宿題を考えたい。一つは私たちが持っていたはずの制度を再発見することです。石田先生は森鷗外の見た都市を出発点として考えましたが、鷗外が近代都市計画を組み立てる時に、社会にあった制度の取捨選択をしている

はずで、鴎外が見なかった制度を歴史の中から抽出し、再評価する作業が必要ではないかと考えています。もう一つは現場において、これから、コミュニティや市民に依拠しない制度をまとった人たちがたくさん出てくることになると思います。いわば、これまで「まちづくり」が目指していた「公共性」ではない、「不十分な公共性」をまとった人たちです。こうした「不十分な公共性」を、新しいまちづくりにどう組み立てていくか、ということも宿題だと考えています。（拍手）

中林

ありがとうございました。では 3 人のパネリストには前に並んでいただき、討論をしていきたいと思います。

渡辺さんからは、「石田先生は最初から計画史を意図しておられていたわけではなく・・・・・」との指摘がありましたが、その計画史研究への変換点に関連する話を改めて 3 人の皆さんから伺いたいと思います。

渡辺

ひとりの研究者がどのようにして自らの研究関心を広げ転換していくか、これはなかなか個人的な、しかし決定的な問題です。私としては、石田さんが当初取り組んだ「土地利用規制」というテーマは当時の解かれるべき大課題だったし、そこから「歴史の文脈」で制度を見ていったのは、当然の展開だったと思います。

歴史研究の中でいかに追究したか。都市計画を社会技術として捉えたとき、社会での実践を前提としての理論構築となりますが、問題は「どうすれば技術が行動指針、すなわち価値的なことを導きうるか」のところです。この点について石田さんはどう取り組んだか。これは是非これからの皆さんに分析していただきたいのです。

私の感触では彼は、このあたりは割とこだわりがなく「問題の所在が分かれば、解決の仕方は自ずから出てくる」との見方だったかな、と思います。これは、彼の出発点であるスプロール問題がそれで対応できたし、その成功体験がのちの取り組み方に影響しているように思います。都市計画における価値判断は、技術内部から出てくるのか、あるいは現代のように社会的政治的判断によるのか。これはまさに都市計画技術の根幹に関わる論点だと思います。この点も、石田頼房研究で議論を深めていただけると幸いです。

中島

石田先生は“都市計画史研究は授業のために始めた”と書かれていますが、私は実は、このような説明の仕方自身に関心があるのです。60 年代に近代都市計画はおかしいところがあるんじゃないかとの見方が出てきて、70 年代には近代の建築や都市計画の歴史を考え直そうとの風潮が広まる。ところが先生はこのような動きに関係なく都市計画史に踏み込まれたと発言されている。本当にそうならば、線引き制度にかかわられた先生が、その後にトップダウン的都市計画に批判が起こる中で、そのような批判をどう受け止められたのでしょうか。先生は近代都市計画の枠組みに信頼を置かれていて、あまり 60 年代

70 年代の近代都市計画の基盤を揺るがす動きに関心を向けられていなかったようにも思います。それとも本当は本人には相当な悩みがあったが先生の性格からしてそれを表に出されなかったのかもしれません。つまり、時代的な動きにとらわれまいとされたのか、私には分からないが考えさせられるところです。

饗庭

今日の配布資料の年表（渡辺先生作成のものに中島さんと私がちょっと手を加えさせていただいた）を見ると、80年代に都市計画史論文が著しく増えていることが分かります。

少し批判的な見方をすると、現場において、市民と都市計画の対話をしても妥協し負けてしまう、民主主義の仕組みにない主体も出てくる、先生はそのような経験をされたはずです。しかしその経験にどう向き合われたのかが分からないところです。後期はそのような経験から逃げるようにして、歴史研究に向かわれたか、あるいは現場において市民に都市計画をより深く理解してもらうために必要と考え、歴史研究に向かわれたのではないでしょうか。つまり方向転換か市民対応の方法か、この2つが80年代以降の歴史研究への動機ではないか。答えはご本人にしか分かりませんが。

中林

研究者そして教育者としての調査研究に始まり、実践者としての時期を経て、都市計画史研究の取り組まれていく石田頼房研究は、奥が深そうです。これまでの話に加えて、もう一言「これが石田頼房のポイントだ（キモだ！）」を、お願いします。

渡辺

石田さんの研究の面白さは、私にとっては「反計画」の概念です。そこに彼の原点、譲れない点があるのです。そもそも歴史研究というのは、史実と史観から成り立っています。そして「史観」は、「その人が選んだ史実」から組み立てられるのですね。したがって歴史研究はまさに史観が問われるのですが、「反計画」という造語に彼の史観が込められていると思います。

「反計画」というのは「計画しないこと」ではなく、「計画のやり方がまずい」との意味です。「アンチ プランニング」ではなく「ディス プランニング」なのです。彼は「正しい計画」があるはずだとの前提から、80 年代以降の計画がそれに反しているとして「反計画」と呼んだのです。となると「正しい計画」とは何か、という根源的テーマが浮かび上ってきます。彼が想定していたのは、地方公共団体と市民（スプロールの場合は農民）がつくる計画。これが石田さんの「計画世界」です。そこには、企業（すなわち都市をつくり変える巨大な力を持っているが、虎のように凶暴でもある企業）は出てくるのか、出てくるとしてどんな役割として出てくるのか。これが大きな論点です。

「前期石田」の研究では農民という、スプロールをつくっている主体を計画世界に登場させることによって成果をあげました。「後期石田」は企業のような主体を計画世界に積極的に取り込むことをなぜ考えなかったのか。それは、石田さんの譲ることのできない思想的背景から来るものでは、と私は考えますが、このあたりはぜひ皆さん研究をしてください。

中島

プランナー論との関連で石田都市計画を考えてみたいと思います。先生の通史には「人」が殆ど出てこないのが特徴です。業績のリストを見ても高山英華を別にすれば、出てくるのは公衆衛生学者としての森鷗外と都立大学における前任者とも言える石原憲治（石原については私も研究していますが）くらいです。この二人は日本の都市計画史を語るときに必須の人物ではありません。

先生は正面からの人物論をされなかった。近代建築史なら「誰それがこの建物をつくった」に必ず触れるのですが、建築と違って都市は一人の人間がつくるのではないとの思いがあったのでしょうか。また渡辺先生も言われていることですが、石田先生は制度やシステムに対して絶大な信頼を持っていたことも、人が出てこない理由かと思います。制度がしっかりしていれば誰がやってもうまくいくといった、制度主義者的側面があったのではないでしょうか。

このあたりは日本の都市計画の特徴である「プロフェッションがない」に通ずるところかもしれません。そういう意味では石田先生は日本的都市計画を体現されているのかもしれませんし、それが先生の思想なのかもしれません。いずれにしても都市計画プロフェッションとは、の視点から石田都市計画を論ずることがあってもいいのではないでしょうか。

饗庭

私は、法があって都市がつくられるのではなく、暮らしている人々がつくるとする立場で制度という言葉を使いました。それを前提とすると前期石田はとても面白い。現場に行って人々と語り、対話をしつつ、落としどころを探りながら都市を考えています。それが後期石田になると、市民・住民が抽象化されてしまっています。このあたりのことに興味があります。

中林

ありがとうございました。ここでフロアからも“石田頼房論”を語っていただきたいと思います。時間も限られているので恐縮ですが、私から順次指名させていただくということで進めたいと思います。

まず、オランダから来てくださったデルフト工科大学のカローラ・ハインさんにお願いします。

カローラ・ハイン（日本語で話されました）

こんにちは、カローラ・ハインです。この集まりを知らせてくださり有り難うございます。石田先生は私にとって、とても大事な方でした。研究者として教師として人間として、たくさんの影響を受けました。1994 年に文部省の奨学金を得て、日本のいくつかの大学に手紙を書いたとき、東京大学か石田先生の都立大学か、どちらにしようかと迷いましたが、日本の事情を知らないので、パリのオーギュスタン・ベルク先生に相談したところ、「石田先生に師事すれば絶対ちゃんと教えてくれる」と（笑）。

それで都立大の都市研究所に行き、石田先生と中林先生に教えてもらい、日本の都市計画の中心に土地区画整理があることなどを知りました。なぜそうなのかを石田先生は毎週１回、半日をかけて日本語で、お持ちの知識を正確に伝えてくれました。戦災復興のこともいろいろ教えてもらい、高山先生を紹

介してくださり、西山文庫オープンの日も関西に連れて行ってくれました。こうして私の都市計画の研究は大いに進みました。今オランダで学生にこう教えています。「研究にあたって、大学を決めるのか、先生を決めるのか？　先生を決めるのが大学を決めるよりずっと大事です」と（笑）。

1997 年、学術振興会の奨学金をもらった時、石田先生は工学院大学においでしたので、私も工学院に行き、何度も国際会議にご一緒しました。その後アメリカの大学に就職してからも先生と共同で戦災復興の研究などを進め、IPHS で発表をしました。先生は「日本の都市計画を国際的都市計画の中に位置づけてほしい」と言われていましたが、今年のデルフトでの会議では、＜世界の中の日本都市計画＞という特別資料を刊行することができました。

研究者として教師として、何より人間として石田先生は模範的な方でした。私の子どもたちを「海外の孫」として気にかけ、可愛がって下さいました。

最後に三つのお願いがあります。一つは石田先生のアーカイブをつくっていただきたい。そしてそれをオンラインに載せて世界に知らせてほしい。さらに先生の著作の英訳にもとりくんでいただきたい。2018 年の IPHS 横浜大会までにはそれらが完成するよう期待しています。（拍手）

中林

カローラさん、今日のために駆けつけてくださり、本当にありがとうございました。では引き続き会場から、まず広原盛明さんにお願いします。

広原

私は関西の人間なので遠くから石田先生を仰ぎ見てきました。書かれた論文は殆ど読んでいろいろと影響を受けました。都市計画には思想・理念、実践・運動、制度・システムの三つの領域があると思いますが、先生は制度に軸足を置いて、それにとどまることなく広く視野を広げ、最終的に制度・システムの改善に取り組まれたと思います。強靭な理論と意欲をお持ちだった。私は運動の領域に軸足を置いたが、運動と実践がコラボできた時代は、それはそれで幸せな時代でした。公害の時代でもあったので既存の都市計画と対決しなければならなかったのです。運動はゲリラ的なものでもありました。ただ、それは研究への還元が難しく、その意味では不幸な時代を送ったのです。若い方々に言いたいのですが、今、制度・システムは揺らいでおり、他方で運動や実践が多様に展開されています。これは幸せな時代と思えます。制度・システムが揺らいでいる時代ですから、運動や実践に軸足を置きながら研究成果に結びつけることもできるでしょう。若い方々にはぜひ挑戦していただきたいと思います。

中林

ありがとうございました。続いて蓑原敬さん、お願いします。

蓑原

一介の素浪人に発言させてくださりありがとうございます。私が先生から一番学んだのは「科学的・合理的に考える」ことで（これを突き詰めるとマルキシズムまで行ってしまう時代でしたが）、そのよ

うな思考方法を学びました。もう一つ学んだのは「民主主義というものを、個人の主体性を含めてちゃんと考えろ」ということだったのではないかと思います。それは石田さんの「都市計画をすべき主体を考えろ、そしてそれは私たち自身でもある」という言葉の中にあります。

私は 1985 年まで 25 年間、国で都市計画や住宅政策をやっていましが、その立場からすると、先ほど来、明治以降の都市計画が一続きのように論じられていることには大変に不満を感じます。1947 年の新憲法で主権在民となり民主国家となり、自治的にものごとを決められるようになったことに、もっと注意が払われるべきです。石田先生はそれを原点とされつつ、社会主義国にも地方自治があるのか、といったことをおそらく考えながら、悩まれていたのではないでしょうか。

役所を辞めていろんな大学に、都立大学にも応募しましたが、面接で「官は決して公ではない」とか、「市場主義が席巻していることを念頭にプランニングを考えなければいけない」とか答えたせいか、落第続きになりました（笑）。

先ほどの報告で、先生が晩年に“公共規制と市場を総合化しなければ”と言われていたと聞き、もっと早く聞いていれば一緒に仕事も出来たかなと思った次第です。今は近代化の時代とはまったく変わってきていて、人口は減り、成長は望めず、成熟・熟成に向かっています。エコロジカルな意味では危機的ですし、雇用形態もまったく変わるといった時代にあります。結局のところ、先生の原点である、合理性があり、かつ個人の主体性を基礎に、このような時代の姿に介入することが大事と思います。今日は、先生の全体像を教えていただくことができ、感謝しています。

中林

ありがとうございました。では次に小林重敬さんにお願いいたします。

小林

今日は石田学派の集会かなと思って来ましたが、そうではなかったので良かったです（笑）。

歴史学者がこう言っています。「歴史というのは、将来の道筋を見て過去を振り返る、その道筋をどう見るかで、歴史も変わってくる」と。今日は石田先生の歴史研究を主な題材にたくさんの若い方々が参加していることも、とても良かったと思います。

都市計画の抜本改正を声高に語っても動かない今の状況にあっても、何とかしなければいけません。石田先生の考えた道をベースにしながら、多くの方々を包み込みながら、先ほどの中島さんの「複数の主体」、そして饗庭さんの「法と制度」を念頭に議論してほしいところです。要はハードローとソフトローをどう組み合わせるかということですが、私はそれを「枠組み法」と呼んでいます。それを、石田学派は勿論のこととして、若い皆さんが議論し、次代を拓いていただきたいと思います。

中林

ありがとうございました。では続いて大村謙二郎さん、お願いします。

大村

先生の論文などから多くを学びましたが、直接お会いしたのは、私の論文がまとまった頃で、小さな研究会に呼ばれ、緊張して出かけたのが初めてだったと記憶します。その後、ドイツから勉強に来ていたウタ-ホーンさんを紹介され、それ以来、彼女とは20年以上もお付き合いしています。先生が亡くなったことをメールしましたらリプライがあり、彼女は「石田先生は外国人、とりわけ女性研究者を熱心に指導された方だった」、「今では女性研究者も珍しくないが、当時親身な指導をしてくれる方は少なく、第一世代としてとても恩恵を受けた」と書いてきました。今日の集会で、集会などと言うとお里が知れますが（笑）、集いで、先生がこのように多くの人たちを育て、このような立派な追悼の資料集が刊行されたのはすごいことだと今さらながら思いました。

今、石田先生がおられれば、現在の都市計画をどう見られているかを伺い、勉強ができたのにとの思いが募ります。

中林

ありがとうございました。続いて五十嵐敬喜さんにお願いします。

五十嵐

前期石田と後期石田の話がありましたが、先生と一番お付き合いしたのはその転換期で、今日も見えている福川裕一さんなどとでした。そして大きく言えば大谷幸夫さんや宮本憲一さん、早稲田で私が教わった篠塚昭次さんなどの輪の中での交流でした。何が石田を転換させたか。やはり規制緩和とバブル崩壊という「時代」ゆえではなかったかと思います。その時期、よく会ってよく議論しました。「反計画」との言葉が使われていますが、渡辺さんが言われたように、あるべき都市計画があってそれに反するという意味でしょうが、私としては「あるべきが崩壊したゆえの反計画」と言いたいところです。

退任された時に「2019年の都市計画」を語られましたが、ご承知のように21世紀に入って人口減少となって今に至っています。先生がお元気で、反計画とか人口減少とかを今の時代に議論できたらと、今更ながら残念なことです。

皆さんには、“転換の時代の石田とは”とともに“21世紀の都市計画をどう捉えようとしたのか”あたりを勉強し、我々に示してもらえればと思います。さらには、松下圭一、石田頼房、もっと広げれば先日亡くなった下河辺淳などを含めて、人と時代と社会を論ずる機会が設けられればと思います。

中林

ありがとうございました。皆さん熱を帯びたお話でありがとうございます。つぎに中井検裕さん、お願いしま。

中井

この指名の流れの中では、まだ現役の中井です（笑）。研究とは別のことですが、年表によれば1985年に都市計画学会の学術委員長に就かれています。その時に論文審査のルールをつくられました。これによって都市計画学会も、それ以前のサークル的な運営から近代化が図られたと思います。

その後私が担当するようになってからですが、先生から「何でこんな論文が通っているのか」と苦言を呈されたことが度々あります。それは論文の中身と言うより研究倫理的な指摘で、先生の研究倫理の物差しに合わないところがあったのではないかと思います。

今日も制度技術をめぐっていろいろと語られましたが、先生は“都市計画に対するモラル”のようなものをお持ちで、その上に通史が書かれているのでないかと思います。そのように思いつつ著作を読んできています。

中林

ありがとうございました。続いて、野澤康さんにお願いしたいと思います。

野澤

中井さんよりさらに若いのですが、ご指名なので。私は 1995 年に工学院大学に赴任しました。恐れ多くも石田先生と同期入社なのですね。学生時代は石田先生というと学会発表会で最前列に背を伸ばして座られ、鋭い質問をなさる怖い大先生でした。私自身、形態規制の勉強をしていたので建築線の論文など随分学ばせていただきましたが、そんな先生と同僚になり、ご一緒に都市デザイン演習の科目を担当したこともあって、先生の学生に対する接し方など多くを学びました。

先生の工学院大学退任時に、人数は多くありませんでしたがお話いただく機会を設けたところ、専門の話ではなく「鳥」の話、バードウォッチングの話をしたいとなりました。そして「この大学に来て一番嬉しかったのは京王プラザホテルの非常階段にハヤブサが来ているのを見つけたことだ」と。大学は新宿副都心の超高層ビルで、先生の部屋の窓から見えたのです。超高層街のハヤブサの生態観察のメモも取っておられました。

都立大学で先生は都市科学研究科をつくられましたが、工学院大学にも、先生が去られてからですが建築学部がつくられ、まちづくり学科がつくられました。お元気であればそんなこともお伝えしたかったなと思います。

中林

ありがとうございました。では、最後になりますが、松山　恵さんにお願いいたします。

松山

明治大学文学部で日本近代史、特に都市史分野を担当しています。元々は東大建築の大学院にいて明治大正の都市史を勉強しており、面識はなかったのですが書いたものをお送りしたら、とても丁寧な返信をいただきました。それがきっかけで直接お話を伺う機会が得られたのですが、私だけで聞くのはもったいないと思うようになり、確か 2005 年から 3 年間ほどだったと思いますが、中島先生や初田先生などと石田先生を囲む集まりを開いて貴重な勉強をさせていただきました。

先生は、字も角張っていて堅苦しいような印象を持つ方が多いですし、事実、先生の研究はとても実証的ですが、ご性格はざっくばらんでよくお笑いになり、研究会の後の飲み会での話はとても幅広でし

た。一番驚いたのは質問に対して 70 歳代におなりの先生が、「それは分からない。分からないことは分からない」答えられたことでした。私の回りの先生方は「分からない」とは決して言われない（笑）。石田先生の率直さに感銘を受けました。先生のこのような姿勢や学生への対応など、研究内容以外にもたくさん学ばせていただきました。

今日は、若輩の私を誘ってくださり、発言の機会まで与えていただき、ありがとうございました。

中林

ありがとうございました。まだまだ会場の皆さまからお話をいただきたいところですが時間も迫ってきました。最後に、壇上の 3 先生からひとことずつでもお願いします。では逆の順で。

饗庭

いろいろありますが、ひとことで言えば「たいへん勉強になり、ありがとうございました」。（拍手）

中島

私にできることは、やはり都市計画史研究をしっかり進めることです。カローラさんが触れられましたが、2018 年に横浜で国際都市計画史学会、IPHS の大会が予定されています。これを成功させたいと思いますのでよろしくお願いします。（拍手）

渡辺

若い方へ。是非、石田頼房研究を進めてください。それは石田さんを神格化することでもないし、彼の研究成果を丸呑み・丸暗記することでもない。彼の研究に触発されて、積み重ねるかたちで、それを伸ばすかたちで、ある意味では乗り越えるかたちで、やっていただきたいのです。

乗り越えるというのは、言い方はわるいですが、踏み台とすることです。踏んでも壊れない、どこを踏んでいるか分かるのが、石田さんの研究体系の特質です。世間では往々にして踏むと壊れてしまう研究成果が多いかもしれませんが、彼の研究はむしろ「踏まれるために蓄積されてきた」と私には思えるのです。これはもう「学界の公共財」ですね。

都市計画史研究をやりたいが、まだ何をやったらいいか分からない、という方は石田頼房研究から始めてください。必ず修士論文は書けます。がんばれば博士論文のテーマも出てくるでしょう。そのくらい学びがいのあるのが、研究者・石田頼房です。

今日のこの会が、しのぶ集いを乗り越えて“研究集会”のようであったこと。これはまさに石田さんが望んでいたことであり、喜んでおられると思います。研究者を“今日のように弔う”集まりがもたれるのは、素晴らしいことです。私も「末期高齢者」ですから、こういうふうに自分も弔われたいなぁとさえ思います。（拍手）

最後に、高見澤さん、中林さん、加藤さん、大竹さん、皆さんを中心にした一年間の準備を経て、良い集まりの場をつくってくださったことを、改めて心から感謝いたします。（拍手）

中林

パネリストの皆さま、たいへんにありがとうございました。

私がまとめるまでもありませんね。皆さまそれぞれに石田頼房先生が遺したもの、受け継ぐべきものを、一つでも二つでも、胸に刻んでいただけたことと思います。

それでは、これで閉会といたします。ありがとうございました。（拍手）